

追悼・小林恵美子

無明塾の支えであった

秋山 駿

恵美子さんが亡くなられた、という報知を受けたとき、わたしは、思ひも寄らぬ不意を打たれたような気がして、しばらく茫然としていた。そんなことがあっていいのか……。

昨年夏、講座「無明塾」の講師として出席したとき、恵美子さんが明るく振る舞っておられるのを見て、そうか、病気の難所を越えられて、もうすっかり回復の途上にあるのだな、これからは一日一日と良く成られるばかりだ、と感じていたからである。

好かったな、これで安心（わたしは、である）だ、と、わたしは思った。

というのも、その前年、一昨年夏の「無明塾」のとき、恵美子さんがおられなかった。塾の講座が終って懇親会に移った頃、それまでもうすうす感じていたのだが、どうも今回は塾の空気が違う、感触が異なる、と強く感じて、中野孝次さんだったか窪島誠一郎さんだったか、——恵美子さんは居るの？ と訊いた。そのとき初めて、恵美子さんが病気で、不在である、と知った。

その人の不在が、その人の存在の大きさを知らせる。ああそうだったのか、無明塾の明るく、弾んで、伸びやかなところのある空気は、恵美子さんのところから発していたのか、と、発見するような思いが走った。

改めて、考えることがあった。自分で言うのもおかしいが、わたしは、それを交際というのか、社交というのか、いや、もっと些細な、ごく日常的な会話の場面でも、ぎこちなく、不器用なのである。

もともと、これは、わたしの世代の特徴かもしれない。すでに三十年も前から、わたしは早稲田大学文学部の仲間と、おれ達はもう時代に合わないな、なにしろ「挨拶」というものを忘れて生まれてきてしまったからな、とお互いに言い合った。

そんなわたしが、無明塾の空気のなかでは、のんびりすることができた。これが、恵美子さんの御蔭である。

では、無明塾のとき、恵美子さんは何をしていたのか。

先日、テレビのワイドショーの練達の司会者が、もう一人の他局のワ

イドショーの練達の司会者の、その司会術を批評していたが、それがヒントになる。

おかしな比喩になるが、とことわりながら、武術の話を持ち出した。

その司会者は、対面して話を聴く相手をじつと見ながら、しかし同時に他のゲスト、あるいは視聴者参加者



秋山氏(左から3人目)と、恵美子(同2人目)＝昨年夏の無明塾

の八方を観て、からだ全体で反応している、という。それはつまり、武術の真剣な立ち合いの気魄と同じものだ、と。

これは、おそらく、宮本武蔵「兵法三十五箇条」中の、「目付の事」からの引用であろう。

「観見二ツの見様、観の目つよく、

見の目よはく見るべし」とある。見とは、われわれがふつうに見るそのことだが、観とは、「うらやかに見る也」「いか程も、遠く見る目也」という。

そんな観見を、恵美子さんが、ごく自然にしてくれていたと思う。いまになつていろいろ想起こすのだが、無明塾の控えの室で、ふと、あんな物があるといいな、こんな事があるといいな、と思っていると、恵美子さんが実にさりげなく、すうつとその空虚を埋めてくれるのだ。

それが観の目の働きであろう。無明塾の明るく、弾んで、伸びやかな空気は、この観の目が支えていたのだ。

むろん、恵美子さんは、司会者ではないから、ただ、黙っている。ただ、人の言うことをじつと聴く。

わたしはなんとなく、恵美子さんと沢山の話をしてきたように感じていたが、実際にはそれはなかった。ただ、こちらの言うことをじつと聴いて、何でも真つ直ぐに受け止めてくれる、と明らかに感ずるので、沢山の話をしたように思ってしまう。

恵美子さんの頬笑みが、鮮明に甦る。あの頬笑みは、人の訴えをじつと聴く、何か仏像の頬笑みに似ている。恵美子さんの霊よ、安かれ。

(文芸評論家)